View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

〈論　文〉

信濃のことば・まとめ

大　橋　敦　夫

1．はじめに　―― 講座のふりかえり ――

前回の講座「信濃のことば――海こそなけれ、言の葉の幸ふ――」(2016.3)と、今回の講座「信濃のことば――海こそなけれ、言の葉の幸ふ――（その２）」(2018.1－3)で、長野県内７か所の方言が取りあげられました。各回の講師の先生方が指摘された特徴をごく簡潔に整理し、次のようにまとめてみました。

（１）　松本……敬愛の方言：また、来ましょ。（＝来てください。敬愛の命令形）
（２）　伊那……親愛の方言：待っとるに。（＝待っていますよ。）
（３）　佐久……友愛の方言：えべさ。（＝行きましょうよ。）
（４）　長野……友愛の方言：なっちょだい。（＝調子はどう？）
（５）　上田……親愛の方言：だめだに。（＝だめですよ。）
（６）　飯山……友愛の方言：歩こさ、飯山。（＝さあ、歩きましょう。）
（７）　木曽……共愛の方言：世話になったにゃー。（＝なりましたねぇ。）
　　東西対立の最前線・古語の宝庫

いずれの地域も、人との関わりを重んじた表現を豊かに持っているという点で、共通性があるように感じました。

すでに、各講座のまとめの論文において、触れられている点の繰り返しがあることも承知の上で、全７回の講座内容をふまえ、「信濃のことば」のまとめをはかりたいと思います。

２．長野県方言の位置づけ・特徴

２－１　東西方言の境界

日本語の方言を区画すると、まず東西方言の対立という特徴が浮かびあがります。たとえば、アクセントの点で、東京式と京阪式に2大別されます。また、語法でも、

［東］	［西］
行かねえ	行かん
行かなかった	行かなんだ
よく見ろ	よう見よ

のような東西差があります。そして、これらの境界線の多くが長野県の西側の県境を走っています(後掲、図１・２参照)。

したがって、長野県民は、長野県内に居ながらにして、日本語方言の東西差というダイナミズムを感じ取れるわけです。

２－２　方言区画：地域差

県域の広い長野県は､行政区画のまとまりとして､４つの区域を設けています(後掲、図３・馬瀬(2003)参照)。

北信：千曲川流域の北半地域。長野・千曲・須坂・中野・飯山の各市と埴科(はにしな)・上高井・下高井・上水内(かみみのち)・下水内の５郡からなる。

東信：上田市以東の千曲川上流地域。上田・東御(とうみ)・小諸(こもろ)・佐久の４市と小県(ちいさがた)・南佐久・北佐久の３郡。

中信：松本平をはさみ、北は姫川流域から南は木曽谷に至る地域。松本・大町・安曇野(あずみの)・塩尻の４市と北安曇・東筑摩・木曽の３郡。

南信：天竜川流域地域。諏訪と伊那郡に分ける。岡谷・諏訪・茅野・伊那・駒ヶ根・飯田の６市と諏訪・上伊那・下伊那の３郡。

長野県方言の区画については、この４区分を援用しながら、次の５区分を立てます(後掲、図４・馬瀬(2003)参照)。

東北部方言：千曲川下流域、下水内郡栄村一帯の方言。秋山郷方言が属す。

北部方言：上・下高井、上・下水内(栄村を除く)、千曲・埴科の方言。この地域

の中心都市は長野市。

東部方言：南・北佐久、上田・小県、埴科南部の方言。この地域の中心は上田市。

中部方言：安曇野(松本市奈川を除く)、 北安曇、 東筑摩、 諏訪、上伊那(南部を除く)の諸地方の方言。この地域の中心都市は松本市。

南部方言：下伊那および上伊那南部、松本市奈川および木曽地方の方言。大きく伊那谷と木曽谷の方言とに分ける。伊那谷の中心は飯田市、木曽谷の中心は木曽福島町。

これらを順に、秋山郷方言・北信方言・東信方言・中信方言・南信方言と呼ぶことも可能です。その際、注意したいのは、行政区画と方言区画とに、ズレが生じることです。

具体的には、行政区画上、諏訪市･諏訪郡･伊那市･上伊那郡は、南信に属しますが、方言区画では、中信方言(中部方言)に属します。また、松本市奈川・木曽郡は、行政区画上は中信ですが、方言区画では、南信方言(南部方言)に属します。

また、県境を接している山梨県・静岡県の方言とのつながりがあることから、県名の頭文字をとって「ナヤシ方言」と呼ばれることがあります。そっくりな方言同士ということではありませんが、語尾に「～ずら」を用いる等の共通点があります。

さらに､それぞれの県とで､共通に使われている語例があります。山梨県内でも､「持ちにいく(＝受け取りに行く)」「とぶ(＝走る)」が使われていたり、静岡県内でも､「いただきました(＝ごちそうさま)」「こずむ(＝沈殿する)」が使われていたりします。

３．特徴的な地域差(長野県内)

秋山郷方言は、他の４地域と比べ、著しい特徴を持っています。平家の落人伝説も残る地域ですが、その方言も、中世(室町期)の日本語の特徴をよくとどめています。開合の区別(オ段長音である開音[ɔ：]と合音[o：]の使い分け)があったり、合拗音[kwa]を残していたり、ハ行音が[Ｆ]であったりと、発音を中心に顕著な例が見られます。

次に、他の４地域の地域差をいくつかの単語によって比べてみましょう。

	北　信	東　信	中　信	南　信
メンコ	ぱっち	ぱっちん	めんこ	けん

かわいそう	もうらしい	おやげねぇ	もげぇ	むごい
まぶしい	かがっぺぇ	かがっぽしい	ひどろってぇ	ひだらっこい
疲れた	ごしたい	しんのー	てきねー	えらい
内出血の色	ぶすど色	ぶっと色	ぶんど色	くろじ
出迎えの挨拶	おいでなして	おいでなんし	おいでなして	おいでなんしょ

東北信と中南信とで、２区分できる例(メンコ・かわいそう・まぶしい)、共通性がなくそれぞれが特徴的な例(疲れた)、北東中信と南信に分かれる例(内出血の色)、北中信と東南信に分けられる例(出迎えの挨拶)となります。

東北信と中南信とで分かれる例からは、明治初期の県域の違い(合併前の長野県と筑摩県)を想い起こしますが、それですべてが割り切れないことも、用例が語っています。

４．方言が語ってくれること

４－１　古語は方言に残る

（1）中世語の音韻

前章でふれた秋山郷方言の具体例です。古い日本語の姿は、文献資料のみが伝えているのではなく、地域の方言の中にも生きています。

① ハ行子音

秋山郷方言の具体例をあげてみましょう。

「ひ(火)」[Fi]「ひゃく(百)」[Ｆjako]「ひざ(膝)」[Ｆuratama]

ハ行子音は、[p>f>h]と大変化を遂げてきましたが、奈良時代から室町時代にかけては、Ｆ音であったと考えられています。そのＦ音が、明治生まれの方々の中で、保持されてきました。

②オ段長音

これも、秋山郷方言の例をあげてみましょう。

開音：「トァージ(湯治)」[tɔ:i]　　合音：「トージ(冬至)」[to:i]

開音：「トァー(塔)」[tɔ:]　　合音：「トー(十)」[to:]

中世以後、開音は、合音に吸収されてしまい、オ段長音は１種類しかありませんが、この区別も、長く保持されてきました。

しかし、秋山郷でも、若い世代に向かっては、急速に共通語化が進んでおり、かつてのような話者は、減っているのが現実です。

③ 合拗音

これは、秋山郷以外の地域でも話者を見つけることができる例です。

「かじ(火事)」[kwaʒi]クヮジ

「がんたん(元旦)」[gwantan]グヮンタン

この合拗音も中世以後、W音が落ちて、直音化([ka])してしまいます。

（２）古代語・古代語法の残存

① まる

北信にお住いの方ですと、幼い子に向かって「おしっこ、まっといで(＝小便をしてきなさい)」と言うことがあると思います。この「まる(＝排泄する)」は、『古事記』上巻に用例がある古代語の残存例です。

天照大御神の営田(つくりた)のあを離ち、其の溝を埋み、亦、其の、大嘗(おほにへ)を聞し看す殿に屎(くそ)まり散しき。

(訳：アマテラスオホミカミが大嘗をなさる御殿に糞をしてまき散らした。)

〈参照：新編日本古典文学全集１『古事記』小学館　1997.6〉

② ななーと(禁止表現)

また、これも北信地域では、昭和30年代くらいまでは使われていたようですが、

「ななしと」「ななやっと」(＝してはいけません)

という禁止の表現があります。

その語源は、古代語の「なーそ」という禁止の表現にあり、「古語は方言に残る」という実例であると言えます。

４－２　言語的文化重点領域

ある言語社会で興味関心を寄せている分野の語彙は、豊富になります。したがって、どの意味分野の語彙が多いかを見れば、その言語社会の有り様(歴史・風土・文化等)を明らかにすることができます。

日本語全般では、気象・季節・地形・水勢・植物・魚類・鳥類・虫類の語彙が多く、天体・鉱物・畜類・人体などの語は少ないと言われています。

ここに、日本人の生活様式の歴史を伺うことができます。すなわち、自然の推移に

留意しながら、採集や漁撈、農耕で暮らしをたてる一方、牧畜には深く関わらず、鉱物もあまり利用せずにきたことを反映しています。

この言語的文化重点領域の見方を、長野県方言に向けてみると、どうなるでしょうか。

（1）方言の事例

① 出世魚

日本語一般では、魚類の語彙が豊富なことは前述のとおりです。多数の名前があるとともに、なじみの深いサカナの一部は、「出世魚」として、個体の成長とともに名前が変化する例があり、魚とともに生きてきたことを感じさせます。

まず、代表的な「鰤（ブリ）」の例を確認しましょう。

セジロ→ツバス→ワカナ→カライオ→イナダ→ワラサ→ブリ

（三重県熊野灘沿岸）

このような出世魚は、海のサカナだけではないことを指摘したいと思います。海なし県の長野では、川魚に親しむ食文化があります。代表的なのは、佐久地域の鯉（コイ）で、さまざまな調理法があり、冠婚葬祭はもちろん、ふだんの食卓にもしばしば登場するものです。そのため、つぎのように名前が変化する「出世魚」となっています。

アオッコあるいはコイッコ（稚魚）→トウザイ（当歳・１年目）→チュウッパ（中羽・２年目）→キリゴイ（３年目で出荷）

② 雪

雪国のイメージの強い長野県ですが、北に行くほど、その量は増していきます。雪が降ったあとの処置は、東信の佐久・上田ですと、「雪突き」ですが、北信の長野では「雪かき」、さらに北上して飯山以北では、「雪掘り」をしなければなりません。南信では、積もるほど降ることは、あまりないのではありませんか。

最北端になる秋山郷では、雪に関する方言が240ほどあると言われています。雪の降り方・積もり方、雪を片付ける道具等、豪雪地帯ならではの語が豊富にあります。

（2）関連の事例

① 校章の文化誌

学校の校章に何がデザインされているかを見ていくと、その地域の言語的文化重点領域を知ることができる例があります。

たとえば、お隣りの新潟県十日町市内にある小・中・高30校の校章の半数は、雪の

結晶をデザインしたものです。同じ雪国なので、長野県内も雪の結晶が多いのかと思いきや、一番多いのは、桑(実・葉)・蚕などで、かつての養蚕王国を反映しています。

② 公共図書館の「郷土資料」の特設分類

公共図書館の郷土資料コーナーは、地域性を反映した特設分類を工夫している館が多く、こちらも言語的文化重点領域を知る手がかりとなります。

これもお隣りの新潟県の例ですが、十日町市立図書館や上越市立高田図書館では、雪(十日町)やスキー(高田)に関する文献が別置されています。県境を越えた長野県内の市立飯山図書館でも、スキーと雪に関する文献を特設分類しており、雪国としての共通性がうかがわれます。

また、神奈川県立図書館(横浜市)では、「海難事故判例集」を別置しており、港町横浜のおひざ元ならではの感があります。

③ 県境地域の公共図書館の郷土資料収集・日刊紙の購読

山梨県に近い富士見町立図書館の郷土資料コーナーには、『小淵沢町史』など、山梨県側の郷土誌も置かれていますし、新聞コーナーでは、山梨県の地方紙である『山梨日日新聞』を読むことができます。

同様に、群馬県に近い中軽井沢図書館でも、群馬県の地方紙の『上毛新聞』がありますし、群馬県内の郷土誌がいくつか置かれています。

人の動きがあれば、当然、そこに言語の交流もあることが予想されます。

5．今後の研究に向けて

5－1 「気づかれにくい方言」の調査・研究

その地域特有の特色ある単語(「俚言・俚語」と言う。長野県方言ならば「ずく(＝やる気・意欲)」)は、全国的に消えていく運命にあります。共通語化が進んでいるのは、事実ですが、いずれ日本全国まったく同じような言葉遣いになってしまうのでしょうか。

そう事は単純に運ばないように考えています。南北に長く、ある程度の広さを持った国土ですので、それぞれの地域での独自な言葉遣いというのは、意外としぶとく残ると予想されます。その根拠として「気づかれにくい方言」を挙げたいと思います。

その定義は以下のようなものです。

形態や意味あるいは用法が全国共通語と異なるにもかかわらず、当該共同体にお

いては、地域的、社会的変異であることが気づかれにくく、全国共通語だと意識されている言語現象や言語変異体を指す。(沖裕子執筆／佐藤武義･前田富祺編『日本語大辞典』朝倉書店2014)

長野県内の例では、

いただきました(＝ごちそうさま)

家がたたった(＝建った)

とんで来い(＝走って)

などのようなものです。いずれも、共通語形ですが、意味が地域独特になっていて、その地域を離れないと、方言であることに気がつきにくいものです。

こうした例は、全国どこにでもあるのですが、その名のとおり、気づかれずにきたので、これまでの方言集や方言辞典には、ほとんど載っていません。語源・使用開始時期・使用範囲など、これから記録に留めていかねばなりません。

５－２　接触領域の言語交流状況の調査・研究

県境地域の公共図書館の例でみたように、県境を越えて交流の活発な地域があります。それぞれの地域の方言使用状況(交流状況)に踏みこんだ調査・研究が少ないように思われます。これまでに、いろいろな人的・物的交流が進んでいる所では、深みのある研究が期待できます。

５－３　「未開拓」地域での調査・研究

長野県内の方言を対象にした調査・研究は、明治以降、千を超える研究文献の蓄積があり、他県にひけを取るものではありませんが、市町村別にみると空白域があります。近隣の方言調査に代表させていて、方言区画の面では、それも一つの見識ですが、それでもその地域ならではの事例があることを期待し、調査を行ないたいものです。

５－４　語源研究

佐藤厚先生の講座(飯山の方言)で、面白い用例が挙げられていましたね。

① ぶった色(飯山)：内出血の色←どこかにぶった(＝ぶつけた)色

② じょんのび(飯山)：くつろぐ←だんだんに伸びる

いずれも、「わが家では」という限定で語源が解説されていましたが、「ぶった」は、

「ぶつけた」に由来する、「じょん」は、べつに「じょんじょんに(＝じゅんじゅんに)」という語があり、それから来ていると解釈するというものでした。

言語学的には、また別の語源説が立てられることもありますが(注１)、当事者がどのように意識しているか、というのは大切な点で、記録に値します(これを「当事者語源」と呼びます)。

当事者語源で有名な例は、「真田の逆さ言葉」と呼ばれるものです。

東北信では、誘いかけのタイミングで、「さあ、行かず(＝行きましょう)」ということがあります。「行く」のに、「行かない」とは、どういうことですかと問われると、上田の方は、これを「真田の逆さ言葉」といって、戦国時代、武田方を混乱させようとして、わざと反対のことを言った名残ですと説明されることがあります。

その武田方の本拠地・甲府市でも、実は「さあ、行かず」を使います。その由来を尋ねると、上田での説明と非常によく似た内容が語られます。曰く、戦国時代、味方だけにわかるように反対の言い方をしたものです。

これらも、まさに当事者語源で、実態は、戦国時代の語形「行かうず」の「う」が落ちた形(「行かず」)で使われている例で、これも「古語は方言に残る」の一例です。

このような事例の掘り起こしを続けたいものです。

５－５　「書かれる方言」のデータ収集・分析

方言は、本来は話し言葉であるわけですが、共通語化の進展とともに、書き言葉としての面での活用が意識的になされるようになっています。

お土産屋さんに、ご当地の名産品とともに、方言をあしらった暖簾などが並んでいることがあります。このような方言の活用が、イベントのスローガンや、さまざまな行事のネーミングにおよんでいます。長野市内には、観光客のお出迎えのポスターに「おいでなんし」と表記されたものが目立ちますね。

その地域で、どんな語が、どのような活用のされ方をしているのか、調査・分析を重ねていくと、その地域の方の方言に寄せる思いが浮かび上がります(井上ほか2013)。

５－６　強力語／残存語／死後・廃語

方言は無くなると、明快に言い切ってしまう向きもありますが、これまで述べてき

たように、事情はそう単純ではありません。残るものと、残らないものとの区別を考える必要があります。

根強く残るものと考えられるものを「強力語」、あっさりと無くなってしまうものを「死語・廃語」と呼ぶことにします。(「残存語」は、その中間です。)

強力語の典型例として挙げられるのは、次のような気質を表す言葉です。

じょっぱり(＝強情を張ること)[津軽]

いごっそう(＝頑固者)[土佐]

もっこす(＝意地っ張り)[肥後]

その土地の方々は、自らこの語を使い、それが方言であることを自覚されています。さらに、そのような気質の人間であることに誇りを持っているようにも見受けられます。こうした語は無くなりにくい。もし、この語を使うことをやめてしまったら、自分たちの存在意義が無くなってしまうような、大切な語です。長野県方言で挙げるならば、「ずく(＝やる気・意欲)」ということになるでしょう。

一方、死語・廃語の例としては、子どもの遊びの言葉や、仕事に関わる語が挙げられます。

祖父母の世代、あるいは両親の世代の遊びが、子どもたちに継承されにくくなっています。また、産業形態・就労状況が変わって、かつての養蚕王国・長野の姿は、博物館で学ぶものとなってしまい、養蚕用語も忘却されつつあります。

方言の推移は、私たちの生活そのものを見つめることにつながっています。

注

１．「じょんのび」を多用する新潟県側では、その語源について、「自由に伸び伸びする」「情のび」「寿命延び」「寿延び」等の諸説があります（大橋勝男編著『新潟県方言辞典』おうふう　2003.2）。

【参考文献】

馬瀬良雄『信州の方言』第一法規　1971.1

馬瀬良雄編集代表『信越の秘境　秋山郷のことばと暮らし』第一法規　1982.10

馬瀬良雄・京極興一・宮井捷二
『日本語セミナー　現代人とことば』銀河書房　1988.11

馬瀬良雄『信越国境秋山郷方言談話資料』大阪学院大学情報学部（文部科学省特定領域研究・成果報告書）2002.12

馬瀬良雄『信州のことば　21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社　2003.6

井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美
『魅せる方言　地域語の底力』三省堂　2013.11

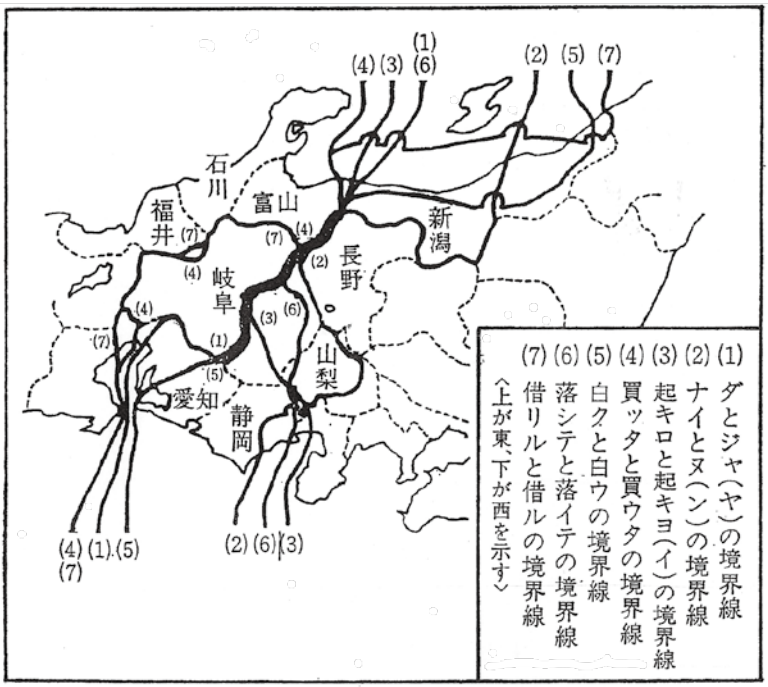
大橋敦夫「〈研究ノート〉「気づかれにくい方言」もしくは「教育方言」収集のすすめ」
『研究紀要』10（長野県国語国文学会）2013.12

【図の引用】

図１・２：和田利政・金田　弘『国語要説　五訂版』大日本図書2003.1

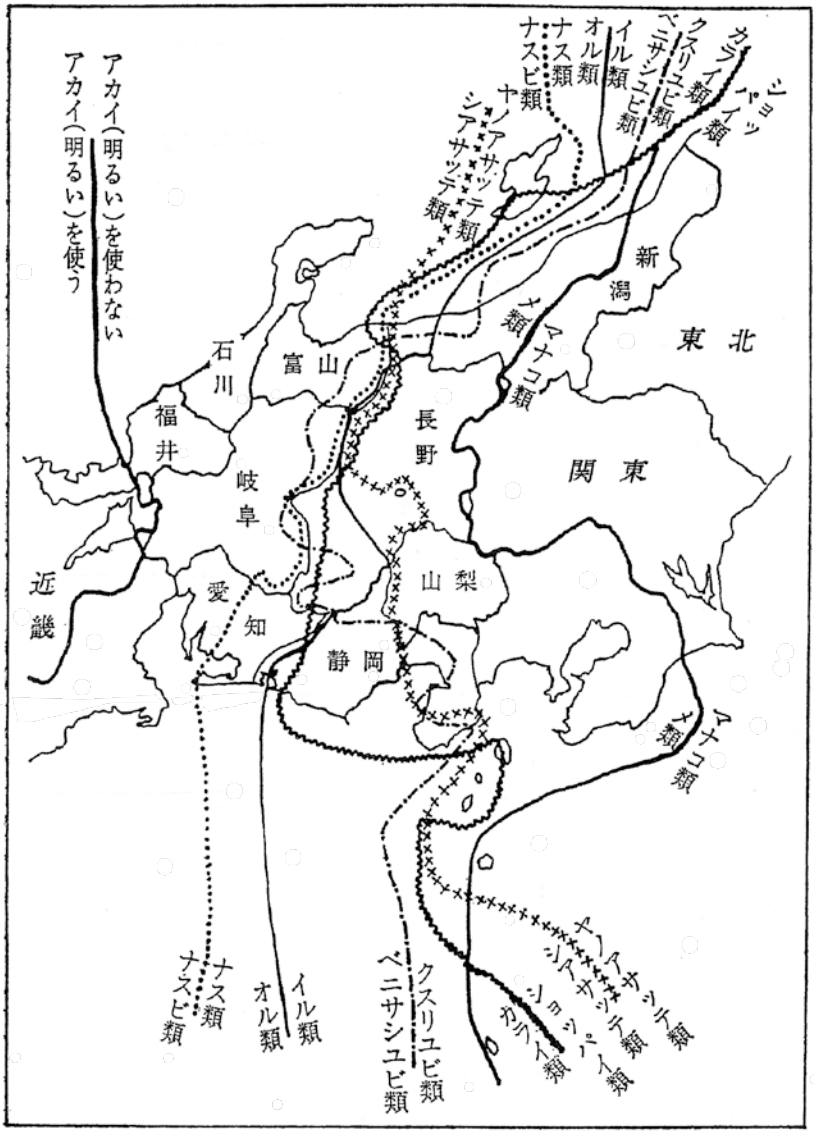
図３・４：馬瀬（2003）

【図１】



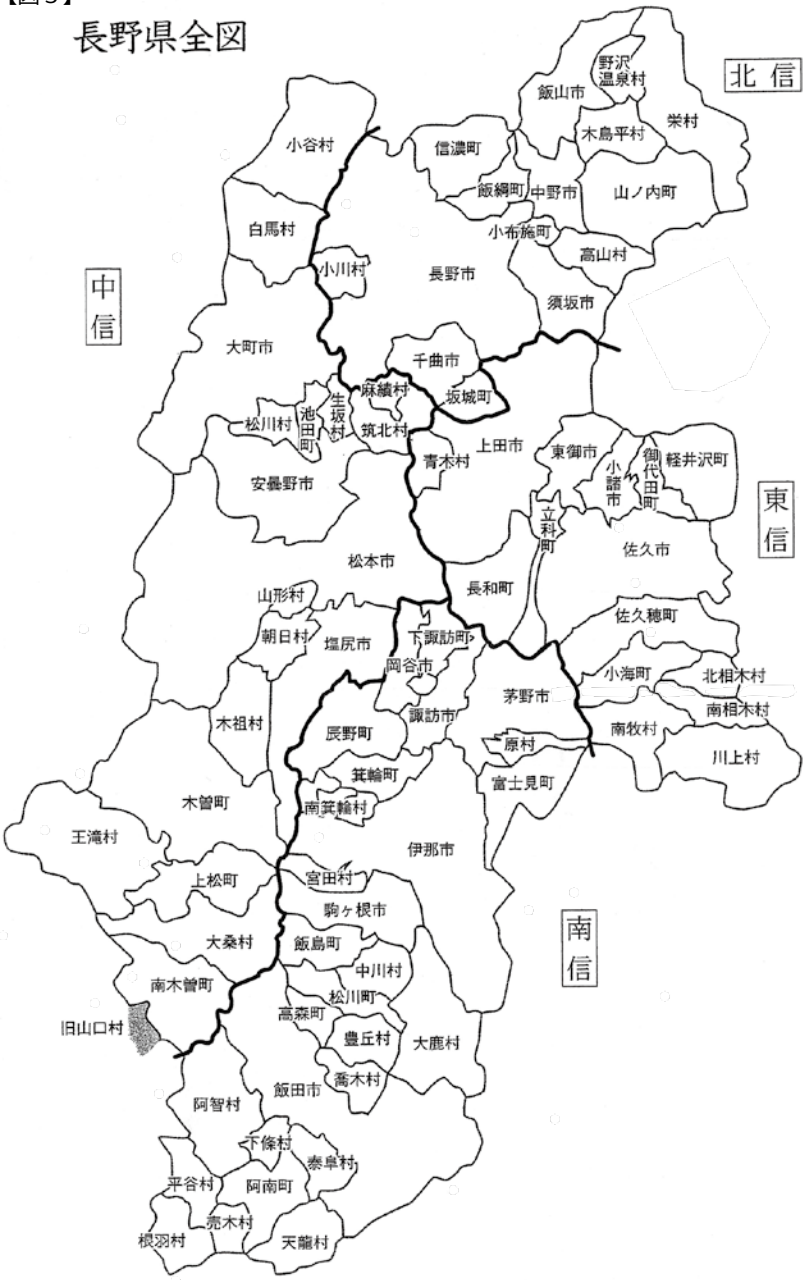
語法における東西方言の境界線
（牛山初男『東西方言の境界』信教印刷刊に基づき作図）

【図２】



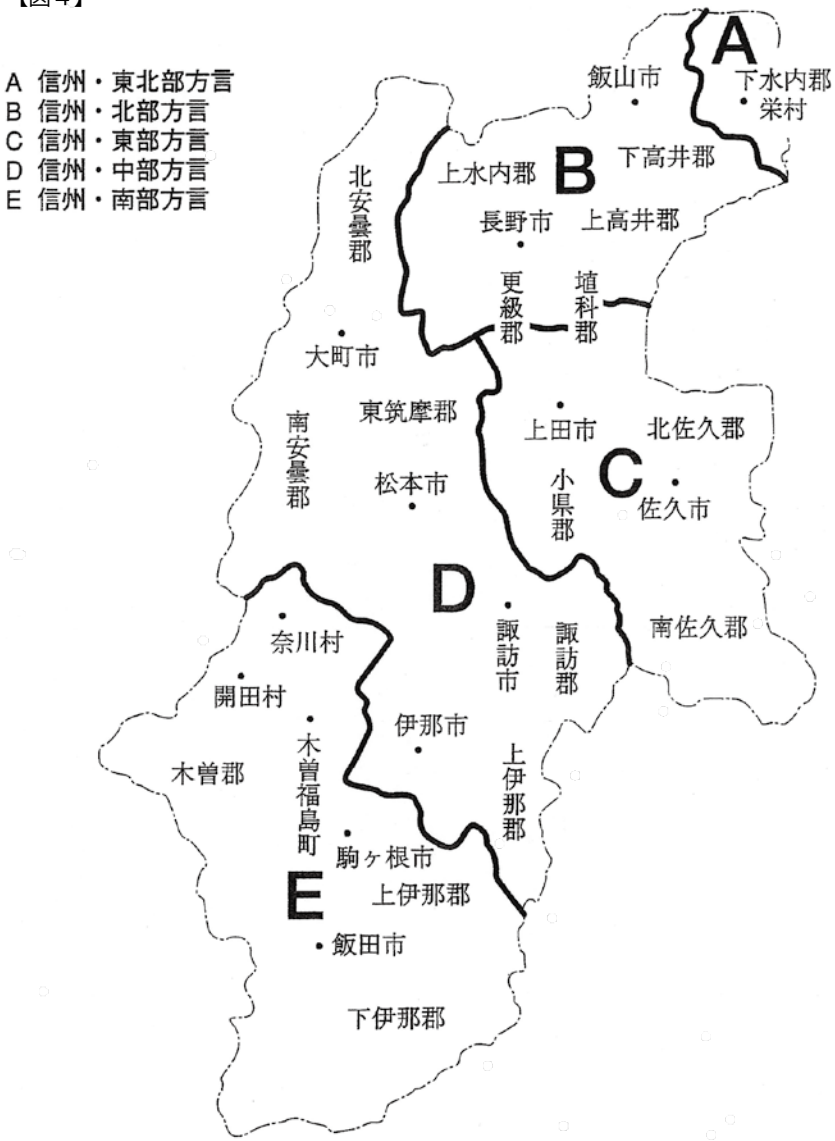
語彙における東西方言の境界線
（馬瀬良雄「岩波講座『日本語―方言―』」に基づき作図）

【図３】



（注）2013年９月30日現在。旧山口村は2005年２月に岐阜県中津川市に合併

【図４】


A 信州・東北部方言
B 信州・北部方言
C 信州・東部方言
D 信州・中部方言
E 信州・南部方言
A
飯山市
下水内郡
栄村
B
上水内郡
下高井郡
長野市
上高井郡
北安曇郡
更級郡
埴科郡
大町市
東筑摩郡
上田市
北佐久郡
南安曇郡
松本市
C
小県郡
佐久市
D
諏訪市
諏訪郡
南佐久郡
奈川村
開田村
伊那市
木曽郡
木曽福島町
上伊那郡
駒ヶ根市
E
上伊那郡
飯田市
下伊那郡

信州方言区画図